

*From here.*

ここからはじめよう。

文部科学省  
現代的教育ニーズ取組支援プログラム  
「地域創成プログラム」の実践 2008年度 報告書



NGU

名古屋学院大学  
NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

## はじめに

地域の活性や再生は、限界集落と称される寒村僻地に限られた問題ではない。出張や旅行で久しぶり訪れた主要都市の駅前が、人通りの消えたシャッター街に変わってしまっていることに驚かされるのは、多くの者が経験していることだろう。自動車普及や郊外型ショッピングモールの開業が、人の流れを大きく変えたことには間違いない。しかし一方で、中小店舗が林立しながら、昔と変わらず活気があふれる商店街が残存している事例もある。

この違いは何に由来するのだろうか。その答えがそうそう容易に見つかるわけではない。しかし一つの仮説として、商店街に対して大衆が求めるモノが変わってきた、と考えられる。商品の集積度の問題だけではなく、それに付随する文化や情報といった発信機能の違いである。既に、世の中にモノは溢れている。人が集まり、魅力的だと認識される都市や地域とは、モノのみにあらず、サービスや文化といったプラス  $a$  を提供してくれる場ではないのだろうか。

さて、「地域創成プログラム」は、身近な地域を生きた教材として扱う名古屋学院大学経済学部の教育プログラムである。これを通じて、学生たちは地域の経済や歴史・文化を学び、魅力あるまちづくり・地域づくりのための手法や施策を実践的に学ぶ。大学本部が位置する名古屋市熱田区、瀬戸キャンパスが位置する瀬戸市。両都市は、陶磁器の消費地・生産地という商流をベースに文化や情報について長い交流の歴史を持っている。本学経済学部生が実際の・具体的に経済活動と地域問題を学ぼうとする際には、これは格好の教材である。

本プログラムは、文部科学省の2007年度「現代GP（現代的教育ニーズ取組支援プログラム）」に採択され、この報告書は採択後2年目の活動をまとめたものである。活動内容の詳細は本論に譲るが、プログラム自体は、地域間交流事業、拠点活性化事業、これに絡んだシンポジウムなど事業を進め、着実に成果を上げ進捗をみている。

このプログラムの成果は、学内外の多数の協力者の存在を無くして語れない。学内では授業科目を担当する教員のみならず、地域連携センターや総合政策部の教職員、学外では名古屋市、熱田区、瀬戸市、多治見市など関係する行政機関の職員や地域住民の方々。また、イベント、シンポジウム、「まちづくり論」には、多くの外部講師に貴重な時間を割いて登壇していただいた。加えて、イベント実施にあたっては(株)都市研究所スペーシアの協力を得た。関係諸氏に心よりお礼申し上げたい。

微々たるものかもしれないが、私たちは魅力的なまちづくりに積極的に貢献したいと考えている。そのためには「地域創成プログラム」の内容をさらに充実させ、一段と効果的な経済学教育の教材をとすためになお一層の精進を図る覚悟である。本報告書をご覧になった方々には、お気づきの点を遠慮なくご指摘いただけることを願っている。

2009年3月

名古屋学院大学経済学部長

木船久雄

# CONTENTS

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| はじめに .....                        | 1  |
| 月次別活動記録 .....                     | 3  |
| <b>「地域創成プログラム」実践授業</b>            |    |
| 地域活性化研究A .....                    | 7  |
| 地域活性化研究B .....                    | 9  |
| 企業研究2 .....                       | 11 |
| まちづくり論 .....                      | 13 |
| <b>もの・まちづくり事業</b>                 |    |
| <b>地域間交流事業</b>                    |    |
| 陶街道交流フェスティバル開催報告                  |    |
| ○全体まとめ、授業との関わり .....              | 17 |
| ○トークセッションI .....                  | 19 |
| ○トークセッションII .....                 | 23 |
| ○陶磁器展、オカリナ演奏他 .....               | 27 |
| シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」 ..... | 29 |
| <b>交流拠点活性化事業</b>                  |    |
| マイルポスト・プロジェクト .....               | 33 |
| <b>地域連携センター活動</b> .....           | 37 |
| <b>今年度事業の評価</b> .....             | 39 |
| <b>文部科学省GP採択シンポジウム</b> .....      | 41 |

## ■月次別活動記録

### マイルポスト

| 日にち        | イベント   |
|------------|--|
| 4/13       | 日比野商店街第16回“ひびのこいまつり”参加<br>トークライブ「ボランティアを始めよう—NPO入門トークライブ」<br>講演者：NGO多文化共生サークルsmile代表 希代翔 氏 |
| 4/19       | “アースデイ愛知2008”出店  |
| 5/5        | “フェアトレードウォーク”参加  |
| 6/1        | 蓄音器トークライブ「蓄音機を囲んでサステイナブル社会を考えるワークショップ」<br>講演者：人間健康学部教授 増田喜治                                |
| 6/14       | 本学オープンキャンパスに出店、来場者にマイルポストの説明を行う  |
| 7/1        | トークショー「ワークキャンプを通して見た世界～あなたの知らない世界のはなし～」<br>講演者：NPOgood!代表 磯田浩司 氏                           |
| 7/6        | イベント“キャンドルナイト”   |
| 7/19       | 本学オープンキャンパスに出店   |
| 7/31       | “岐阜県立飛騨高山高校”来店   |
| 8/3        | 第1回あったかサロン“親子パン作り教室”   |
| 8/8・9      | 本学オープンキャンパスに出店   |
| 8/24       | 第2回あったかサロン“親子パン作り教室”   |
| 8/30       | オープンキャンパス  |
| 9/15       | 長浜・黒壁視察ツアー   |
| 9/23       | サラゴサ博報告会「水を中心にした活動って??」<br>講演者：NPO法人ソムニード 事務局次長 高田尚子 氏                                     |
| 9/27       | 本学オープンキャンパスに出店   |
| 10/1       | エコポイント発行活動始動   |
| 10/4       | 熱田区民まつり出店  |
| 10/12      | “We love NAGOYA 2008”参加  |
| 10/19      | “ふるさと清掃運動会”参加  |
| 10/21      | トークショー「コーヒーに恋した小澤陽祐さんのトークショー」<br>講演者：(有)スロー代表取締役 小澤陽祐 氏                                    |
| 10/26      | ハロウィンパーティ  |
| 10/31～11/1 | 大学祭出店  |
| 11/6       | 日比野商店街活性化委員会始動   |
| 11/15・16   | “全国まちづくりカレッジin摂津”参加  |
| 11/20      | 第1回あったか交流カフェサロン「転ばぬ先のツエ(骨粗しょう症の話)」<br>講師：熱田保健所所長 平田宏之 氏<br>主催：熱田区役所                        |
| 11/22      | “日本平和学会”出店   |
| 11/30      | 第3回あったかサロン“親子パン作り教室”   |
| 12/3       | 他大学(7校)交流会   |
| 12/14      | 第4回あったかサロン“親子パン作り教室”   |
| 12/17      | 蓄音器トークライブ「蓄音器を囲んでクリスマスソングを聴こう」<br>講演者：人間健康学部教授 増田喜治  |
| 2009.1/8   | “ひびのタウンズ”創刊準備号発行   |
| 1/22       | 第2回あったか交流カフェサロン<br>「甘～い、誘い、あなたならどうする？(消費生活のトラブルの話)」<br>講師：名古屋消費生活センター所長 青山和史 氏<br>主催：熱田区役所 |
| 2/6        | 一周年記念パーティ  |
| 2/8        | まちづくり講演会 主催：港まちづくり協議会<br>内容：来場者にその場でコーヒー提供のため出店  |

## マイルポスト

| 日にち  | イベント   |
|------|--|
| 2.15 | 第7回縁側トーク「まちの縁側サミット」 主催:港まちづくり協議会<br>内容:来場者にその場でコーヒー提供のため出店   |
| 2/21 | イベント“GEEK MEETS”<br>参加団体:名古屋外国語大学パフォーマンスクラブ、カラーフレンズ、香、NICO、まりお、みぎてひだりて<br>※参加団体が各自技を披露し合うことでの交流を持った      |
| 3/4  | 法政大学学生による視察  |
| 3/22 | あつたかミニミニ福祉フェスタ<br>参加団体:あつた授産所、さふらん会第3シャローム、生活介護事業所しらとり、名身連第一ワークス、ハートランド森<br>主催:熱田区役所・熱田区社会福祉協議会・地域連携センター |

## 地域連携センター

| 日にち         | イベント  |
|-------------|---|
| 5/29~7/3    | 熱田生涯学習センター連携講座「歴史と伝統から見たアジアの展望」(全6回)<br>講師:人間健康学部教授 曾我良成、大学院客員教授 庵原孝文<br>商学部教授 姜喜永、外国学部教授 和田幸子<br>外国学部教授 佐竹眞明、外国学部教授 西脇隆夫 |
| 5/31~6/28   | 熱田生涯学習センター連携講座「わたしたちで『あつたの情報誌』を創っていこう!」(全5回)<br>講師:経済学部教授 古池嘉和  |
| 6/18        | 第1回熱田区・大学との協働まちづくり専門委員会   |
| 10/4        | あつた区民まつり参加  |
| 10/23~11/27 | 熱田生涯学習センター連携講座「チャイナ再考~中国の現状から探る~」(全6回)<br>講師:外国語学部講師 程群、商学部教授 秋元浩一<br>外国語学部教授 石川輝海、商学部教授 渡辺斉<br>外国語学部准教授 中田昭一、商学部講師 影山裕子  |
| 10/25~12/6  | 熱田生涯学習センター連携・名古屋都市センター共催講座「住みよい町を考えていこう!」(全6回)<br>担当講:経済学部教授 水野晶夫   |
| 12/16       | 熱田区区民のつどい   |
| 2009.3/14   | まちづくりNPO「日比野ひとまちネット」設立  |
| 3/18        | 第2回熱田区・大学との協働まちづくり専門委員会   |
| 3/22        | あつたかミニミニ福祉フェスタ  |

## 地域活性化研究

| 日にち      | イベント   |
|----------|--|
| 5/12・13  | (株)北風寫真館杉原氏による講義『資源収集の視点と方法、ものの見方・考え方について』(A)              |
| 7/1・7    | (株)都市研究所スペース 井澤氏による講義<br>『名古屋市周辺にある各陶磁器産地の特徴の学習とイベント計画』(A) |
| 9/20     | 堀川ウォーターマジックフェスティバル 堀川ガイドボランティア(B)                          |
| 10/4     | 陶磁器産地(多治見)で学習(A)<br>あつた区民まつり 堀川ガイドボランティア(B)                |
| 11/22    | 陶街道交流フェスティバル(A/B)  |
| 12/14    | 木曾川がつなぐやまとまち・インターネットフォーラム参加(B)                             |
| 2009.1/1 | 地域住民・学生による熱田情報誌『なんじゃもんじゃ通信』発行(A)                           |

# 「地域創成プログラム」実践授業

地域活性化研究A



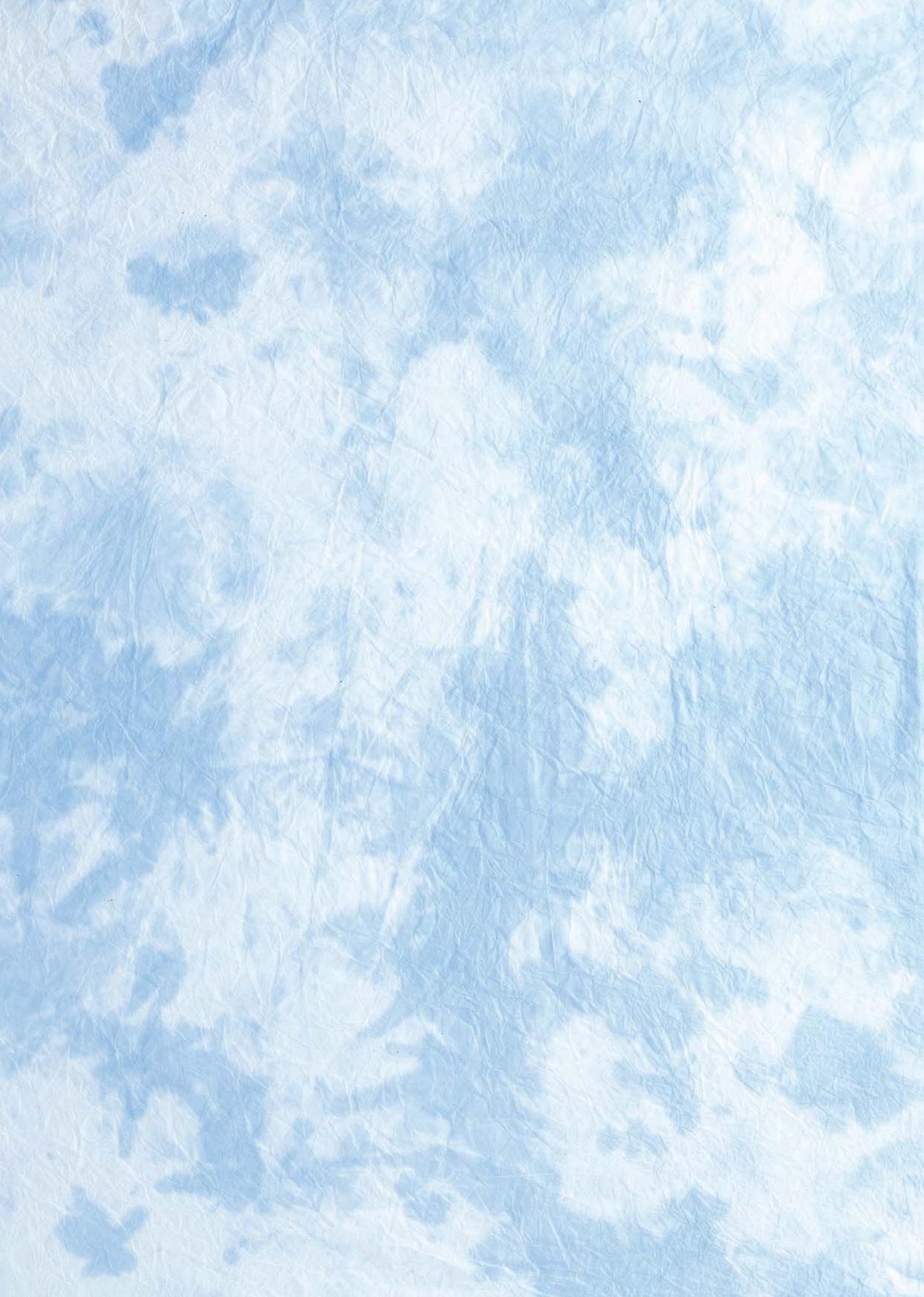
地域活性化研究B



企業研究2



まちづくり論



# ■地域活性化研究A

## 2008年度活動実績

〔科目履修者〕 月4：A1 17名 A2 2名  
火3：A1 18名

## 1. 主たる実習内容

### (1) 熱田区情報誌の作成

春学期の活動の成果としては、熱田区の情報誌を作成することである。地域間交流の受け皿となる名古屋市熱田区における交流基盤の整備を目指して、地域の情報を編集する媒体が必要であるとの仮説に基づき作成を行った。情報誌の作成にあたっては、編集の方法を理解する必要があるため、(有)北風写真館の杉原氏から編集の視点を学んだ。

#### 〔編集方法の学習〕

- 5月12日（月）、13日（火）に学生向けレクチャーを実施
- 講師：(有)北風写真館 杉原氏
- 内容：資源収集の視点と方法、ものの見方・考え方について

### (2) 成果物

学生の収集した情報は、主にキャンパスと周辺情報（地域に開放するキャンパスを目指し、住民の利用を促進するため）である。地域活性化研究の授業の一環として、取材活動を実施した。一方、住民の収集活動は、熱田区生涯学習センターの講座（講師：古池嘉和、杉原正樹）で行った。地域活性化研究の受講生の代表も加わって、キャンパス情報の説明も行った。ささやかではあるが、官・民・大学（教員・学生）のコラボレーションによる情報誌作成活動が始まった。なお、情報誌作成に際して、幅広く情報収集することが必要となり、熱田区のブログを立ち上げた（URL→<http://nmonja.exblog.jp/>）。こうして、2009年1月1日に「なんじゃもんじゃ通信」を発刊した（参考：古池HPからダウンロード可能（[http://www.yoshikazu.com/contents/news\\_topics/](http://www.yoshikazu.com/contents/news_topics/)））。

### (3) 陶街道交流フェスティバルの実施

#### 開催の目的と意義

地域間交流事業を促進するためには、産地（瀬戸・多治見）側の情報を伝えることも必要である。そのため、秋学期には、産地を理解し、産地の情報を伝えるイベントを実施することとした。企画は、学生のアイデアを元にして組み立てた。そのため、学生のアイデアを引き出すワークショップを開催した。

#### 〔学生ワークショップ〕

- ファシリテーター：(株)都市研究所スぺーシア代表取締役 井澤知且
- 日時：2008年7月1日（火）3限／2008年7月7日（月）4限
- 内容：名古屋周辺にある各陶磁器産地の特徴の学習とイベント計画

## 産地学習

多治見市のNPO「たかたおなだ」主宰の加藤氏のコーディネートにより、現地学習を行った。NPOの拠点で、産地の概要のレクチャーを伺い、その後、実際に窯元を訪ねて、生産現場を学習するプログラムを実践した。

### 〔現地学習会〕

■実施日時：10月4日（土）終日

現地講師兼コーディネータ NPOたかたおなだ主宰 加藤由弥子氏

産地の現状と課題（講義）、窯元への見学と講演など

## 内容

トークセッション（Ⅰ部は、美濃焼産地、Ⅱ部は、瀬戸産地）を開催し、焼物の魅力を語ってもらった。展示は、美濃を中心に「こしかたゆくすえ」をテーマとして開催した。また、オカリナグループ『風夢（ふうむ）』の演奏会やろくろ体験、『瀬戸・究極のせとものプロジェクト』と題した、カレー付のカレー皿の販売など、盛りだくさんなイベントを開催した（イベントの詳細は→[http://ngugp.jp/gendai/event/081122\\_fes.html](http://ngugp.jp/gendai/event/081122_fes.html)）。

（参考）陶街道交流フェスティバルの様子



トークセッションの様子



陶磁器展の様子

## 運営

運営は、学生のスタッフが中心となった。サポートは、イベント全体については、委託をしている㈱都市研究所スペースアのスタッフが、また、展示会については、同じく委託先の「NPOたかたおなだ」の三宅氏が中心となって行った。

## 成果

学生にとっては、実際にイベントに携わることで、社会人基礎力の醸成に役立ったものと思われる。また、イベントを体験することで、来訪者とのコミュニケーションやマネジメントなどを通じて、座学では学べない実践的な応用力を修得することができた。

## 2. 次年度に向けて

2008年度は、産地の紹介を行うものであったが、2009年度は、産地の情報を纏めたリーフレットの作成や、産地へのツアーを行うなど、引き続き交流事業を展開する予定である。

## ■地域活性化研究B

2008年度「地域活性化研究B」では、22名の受講者のもと、1. 堀川水上バスガイド、2. インターネット版「堀川検定」、3. 「マイルポスト」フェアトレード企画（フェアトレード商品の販売／フェアトレード・イベント）、4. 陶街道交流フェスティバルでのトークセッション「陶磁器ブランドのこれから」、を各プロジェクトチーム中心に企画運営を行った。

また、年度末には、活動成果報告会を実施するとともに、その成果を研究レポートとしてまとめた。

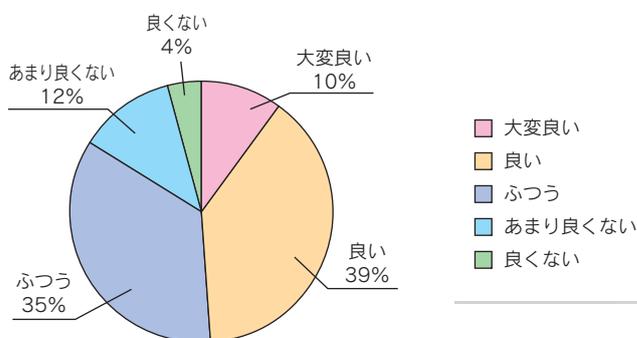
### 1. 堀川水上バスガイド

- ・第6回堀川ウォーターマジックフェスティバル 2008年9月20日
- ・熱田区・堀川クルーズ 2008年10月4日（熱田区民まつり）  
2008年11月22日（陶街道交流フェスティバル）

9月20日開催の「第6回堀川ウォーターマジックフェスティバル」では、昨年引き続き、水上バスでの堀川ガイドボランティアを行った。

昨年度（2007年）はガイド初挑戦であったこともあり、利用者のアンケートでは厳しい意見も少なからずあった。今年度は、その反省から準備・練習をていねいに実施した結果、昨年の「良い」評価が49%であったのが、今年は62%にまで上昇した。

#### 第5回(2007年)堀川水上ガイドの感想

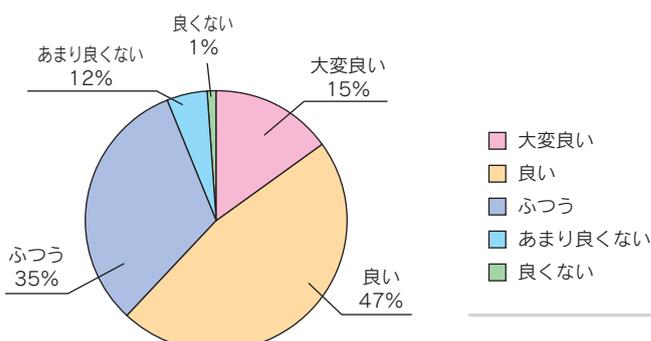


#### 第5回(2007年)主な自由意見

- とても誠実でよかった。
- 好感がもてた。
- 声が小さく聞こえなかった。
- 原稿読んでいるだけ。
- 予習不足・勉強不足

など

#### 第6回(2008年)堀川水上ガイドの感想



#### 第6回(2008年)主な自由意見

- 橋などの歴史がよくわかった。
- はっきり話してくれたので、わかりやすかった。
- よく調べているなあと感じました。
- 学生のさわやかさに好感を持ちました。

など

## 2. 木曾川がつなぐやまとまち・インターネットフォーラム（2008年12月14日）

名古屋学院大学白鳥学舎内で、名古屋の水源である長野県木祖村とその恵みを受ける名古屋を中継で結び、理解を深めるイベントが開催された。全6団体が参加する中、「地域活性化研究B」チームは、堀川ガイドで培った知識をもとに作成したインターネット版堀川検定のブースを出展し、協力した。



第6回堀川ウォーターマジックフェスティバル



インターネット版堀川検定体験コーナー

## 3. マイルポスト・フェアトレードプロジェクト（2008年10月21日）

マイルポストのフェアトレード雑貨の商品管理およびフェアトレードをテーマにしたカフェイベントを企画・開催した。フェアトレード取扱業者で社会起業家の小澤陽祐氏（有限会社スロー代表取締役）をお招きして、前半はトークライブ、後半はワークショップを実施し、フェアトレードについての理解を深めた。



フェアトレード・ワークショップ



陶街道交流フェスティバル

## 4. 陶街道交流フェスティバル（2008年11月22日）

白鳥庭園で開催された「陶街道交流フェスティバル」で「地域活性化研究B」チームは、午後からのトークセッション「陶磁器ブランドのこれから」を担当した。株式会社ブランド総合研究所代表取締役社長田中章雄氏をお迎えして、水野晶夫教授および学生2名がパネリストとして参加し、現在開発中のせとものブランドについて語り合った。

## ■ 企業研究2

### 1 企業連携プログラムのねらいと特色

企業連携プログラムは、次の4つの視点（ねらいと特色）をもっている。

第一に、企業現場を学びの宝庫と捉え、企業・地域との多様なネットワークを活用して、企業の現場から積極的に学ぶという視点である。

第二に、瀬戸と名古屋にキャンパスを有する本学の立地環境を生かして、両地域の代表的でユニークな企業から学ぶという地域連携の視点である。

第三に、企業の現場見学（「企業研究1」）と経営者・実務専門家による講義（「企業研究2」）を組み合わせ、見学と座学のハイブリッド化を図るという視点である。

第四は、名古屋学院大学出身の経営者・研究者によるリレー講義を積極的に取り入れ、大学院と学部の連携強化による学部教育の充実を図るという視点である。

### 2 学びのスタイル

企業連携プログラムは、製造業から金融業に至る多様な業種の会社や各種組織をとりあげる。「企業研究1」が製造業を中心に企業の現場に出かけ現地で五感を通して学ぶのに対して、「企業研究2」は製造業から金融・流通業にわたり企業の最前線で活躍している各経営幹部や専門家による講義と対話から学ぶ。

#### 「企業研究1」：企業の現場に出かけて直接学ぶ

2006-7年度は、隔週ごとに瀬戸地域の代表的な企業7社へ出かけて、工場見学および経営者・専門家による生の声に耳を傾けた。まさに、「百聞は一見に如かず」である。現代の工場や経営が織りなす臨場感に圧倒され、五感を通して学ぶ面白さに目を輝かす学生も少なくなかった。なお受講者数は、受け入れ先の制約などから40数名以内（2年生以上）に抑えている。2009年度は、名古屋と瀬戸の両地域の代表的かつユニークな企業7社に出かけ、工場見学および経営者・専門家による説明を受ける予定である。

#### 「企業研究2」：企業の最前線で活躍中の第一線経営者や専門家によるリレー講義

2007年度は、名古屋圏において流通・金融を代表する企業の経営者による講義を毎週行い、市民にも公開した。経営の最前線と経営トップの迫力に触れ、また市民の熱心な学び心に接して、大いなる刺激を受けた学生も少なくなかった。

### 3 2008年度「企業研究2」講義概要

2008年度は、「名古屋圏の経済と経営」というテーマで、ものづくりと金融・流通の2部構成にし、名古屋圏におけるユニークな企業や地域を取り上げて、第一線の経営者・専門家による講義を行った。本学の学部や大学院で学び博士の学位なども取得して活躍されている経営者や専門家も多数登場した。

授業は、経営者・専門家の講演（1時間）を基に、担当教員の司会のもと受講生（学生・市民）と講演者の交流（質疑応答を中心に20分）を図り、最後に感想や要点などをまとめる方式で行った。担当教員は、笠井雅直、名城邦夫、十名直喜を中心に行い、澤田充（以上は経済学部）、有賀敏之（商学部）の支援を得た。

## 第1部 「モノづくりに生きる伝統と創造」

- 第1講 「名古屋的経営の伝統と創造—セラミックス王国・名古屋の秘訣—」  
十名直喜（本学経済学部教授）2008年9月24日（水）
- 第2講 「素材づくりの産業と経営—鋳物産業を中心に—」  
納富義宝氏（高沢産業(株) 企画部部長）2008年10月1日（水）
- 第3講 「クルマづくりの技術と経営—知識・技術習得の連続性—」  
村瀬眞澄氏（(有)MTCC 代表取締役）2008年10月8日（水）
- 第4講 「繊維産業にみる伝統と創造—浜松地域モデル—」  
渡部いづみ氏（浜松学院大学／愛知新城大谷大学講師）2008年10月15日（水）
- 第5講 「工作機械産業と中小企業の創造」  
藤田泰正氏（(株)クリエイティブ・システム取締役部長）2008年10月22日（水）
- 第6講 「会計と経営の新地平—内部統制実務の現状と課題—」  
浅沼宏和氏（浅沼会計事務所所長）2008年10月29日（水）
- 第7講 「ものづくりと地域ブランドづくり」  
杉山友城氏（(株)アタックス研究員、法政大学客員研究員）2008年11月5日（水）

## 第2部 「地域に生きる金融と経営」

- 第1講 「国際金融の動向と名古屋経済について」  
佐久間浩司氏（(株)三菱東京UFJ銀行企画部次長）2008年11月12日（水）
- 第2講 「東海地区の金融情勢と金融行政の課題について」  
曾根英実氏（東海財務局理財課 金融監督官）2008年11月19日（水）
- 第3講 「地域に生きる流通加工業の経営と環境側面  
—トータル・コスト低減で貢献するコイルセンター—」  
村瀬伸二氏（豊田スチールセンター(株)CSR部グループリーダー）2008年11月26日（水）
- 第4講 「東海経済と金融業の将来」  
加藤千磨氏（(株)名古屋銀行取締役会長）2008年12月3日（水）
- 第5講 「名古屋経済における地域金融の意義」  
石渡世紀氏（瀬戸信用金庫副理事長）2008年12月10日（水）
- 第6講 「世界の金融波乱と名古屋金融市場について」  
石田建昭氏（東海東京証券代表取締役社長）2008年12月17日（水）
- 第7講 「名古屋圏の経済と経営」総括と提言 受講者小論文作成  
笠井雅直（本学経済学部教授）2009年1月7日（水）

## 4 評価

第1部はものづくりを中心に企業と地域に、第2部は地域に根ざした金融と流通に、焦点をあてた。企業の経営戦略や地域のあり方などを多彩な第一線経営者・専門家から直接学んで大きな刺激を受けたことが、毎回のコメントに溢れていた。

また、名古屋市民への公開講座としたため、2～3割を占める熱心な市民（14～27名/回）からのインパクトも少なくなく、静かに授業を受け質問にも加わるなど、教員を軸にして講演者と学生、市民の対話と交流が生まれるなどの副次効果にも注目したい。

## ■まちづくり論

プログラムディレクター 経済学部政策学科教授 古池嘉和

プログラムアドバイザー (株)都市研究所スペースア 代表取締役 井澤知旦

### ■開講趣旨と形式

実社会で起きている様々なまちづくり現象を捉え、その中で悪戦苦闘するまちづくりの実践者を講師に招き、学生に対する講義を行った。その後、科目担当の古池との対談形式に切り替え、問題点を整理して、議論を深めている。

学生は、これらの議論を総括して、レポートをまとめる。質問点は、まとめて整理して、次の講義の中で、古池が答える形式をとった（一部、メール等で、ゲストに聞くこともあった）。

### ■受講者数

10生（新）カリ 119名

04生（旧）カリ 24名 \*単位互換制度により他大学からの履修者1名含む

### ■講義内容

1th

経済学部政策学科教授 古池嘉和

テーマ: **講義の進め方**

講義の概要の説明、当該、講義における「まちづくり」の暫定的概念規定と、その内容の概説

2th

ゲスト: (株)都市研究所スペースア 代表取締役 井澤知旦 氏

テーマ: **西区ものづくり文化の道**

名古屋市西区のものづくり文化の道の概要説明。名古屋の伝統的な産業や文化と、地域で活動が広がるまちづくり運動との関係を説明。

3th

ゲスト: 森旬子デザイン室 森旬子 氏

テーマ: **都市景観～世界の都市**

名古屋市を初め、世界各地の景観デザインについて、スライドを交えての紹介。景観が都市に与える影響について議論を深める。

4th

ゲスト: NPO地域再生研究センター 小林弘嗣 氏

テーマ: **都市と農村(朝来市黒川地区)**

兵庫県の朝来市黒川地区の取組についての事例紹介。黒川で行われている、農村と都市との交流や、子どもたちの学習プログラムなどを紹介。都市と農村の関係について議論を深める。

5th

ゲスト: 有限会社 ビータ 相羽寿郎 氏

テーマ: **クリエイターズマーケット**

ものづくりの町名古屋における創造的な人々を育てるイベントとして、クリエイターズマーケットの果たす役割を説明。伝統的な技と現代的視点の融合や、デザイン都市名古屋の問題点についても言及。

6th

ゲスト:堀田商事社長 堀田勝彦 氏

テーマ:**長者町の事例**

名古屋市内で繊維問屋が集積する長者町。そこで、地場産業の活性化とまちづくりをテーマに活動を展開する堀田氏から、まちづくりの実践とその過程での課題や展望を説明。

7th

ゲスト:名古屋工業大学 北川啓介 氏

テーマ:**パラサイトシネマ**

何気ない都市空間や都市の隙間を、意味ある場に変えていくパラサイトシネマ。その取組は、無機質と思われがちな名古屋の都市空間に彩を与えるものである。ものの見方を含めて、都市を面白くする様々なアイデアを披露。

8th

ゲスト:アルカダツシュ 藤澤徹 氏

テーマ:**ITとまちづくり**

ITがまちづくりとどのように関わっていくのか。現状での問題点と、今後の展望を示唆。ITでのコミュニケーションが、まちづくりにおいて果たす役割を議論した。

9th

ゲスト:竹中工務店 鈴木伸夫 氏

テーマ:**名古屋の都市開発**

久しく経済が好調であった名古屋市。都市開発が目白押しであった。しかし、その開発コンセプトは、環境など今日的なテーマを捉えたものであり、単なる開発ではないことを、笹島の事例を交えて示唆。

10th

ゲスト:サンデーフォークプロモーション相談役 桑原宏司 氏

テーマ:**音楽とまちづくり**

名古屋における音楽の草分け的存在でもあるサンデーフォーク。その成り立ちから現在まで報告。同時に、栄ミナミ音楽祭についても言及。名古屋における音楽文化が育つとすればどのような条件なのか、音楽とまちづくりについての議論を深める。

11th

ゲスト:D企画 小出真弓 氏

テーマ:**アラフォー世代とまちづくり**

流行語となったアラフォー。彼女たちが、消費を謳歌した時代の文化とは如何なるものだったのか。雑誌の編集を通じ、また、自らの体験を通じた1990年代の都市文化を議論。

12th

ゲスト:読売新聞岐阜支局 西村公秀 氏

テーマ:**新聞記者の見たまちづくり**

飯田市や覚王山などを例に、まちづくりがどのように進んでいたのかを解説。記者の視点からみた、まちの見方も示唆。

※以上の詳細は、古池嘉和HP 講義課目にアップしている。

→<http://www.yoshikazu.com/contents/studies/subject.php>

# もの・まちづくり事業

## 地域間交流事業

陶街道交流フェスティバル開催報告

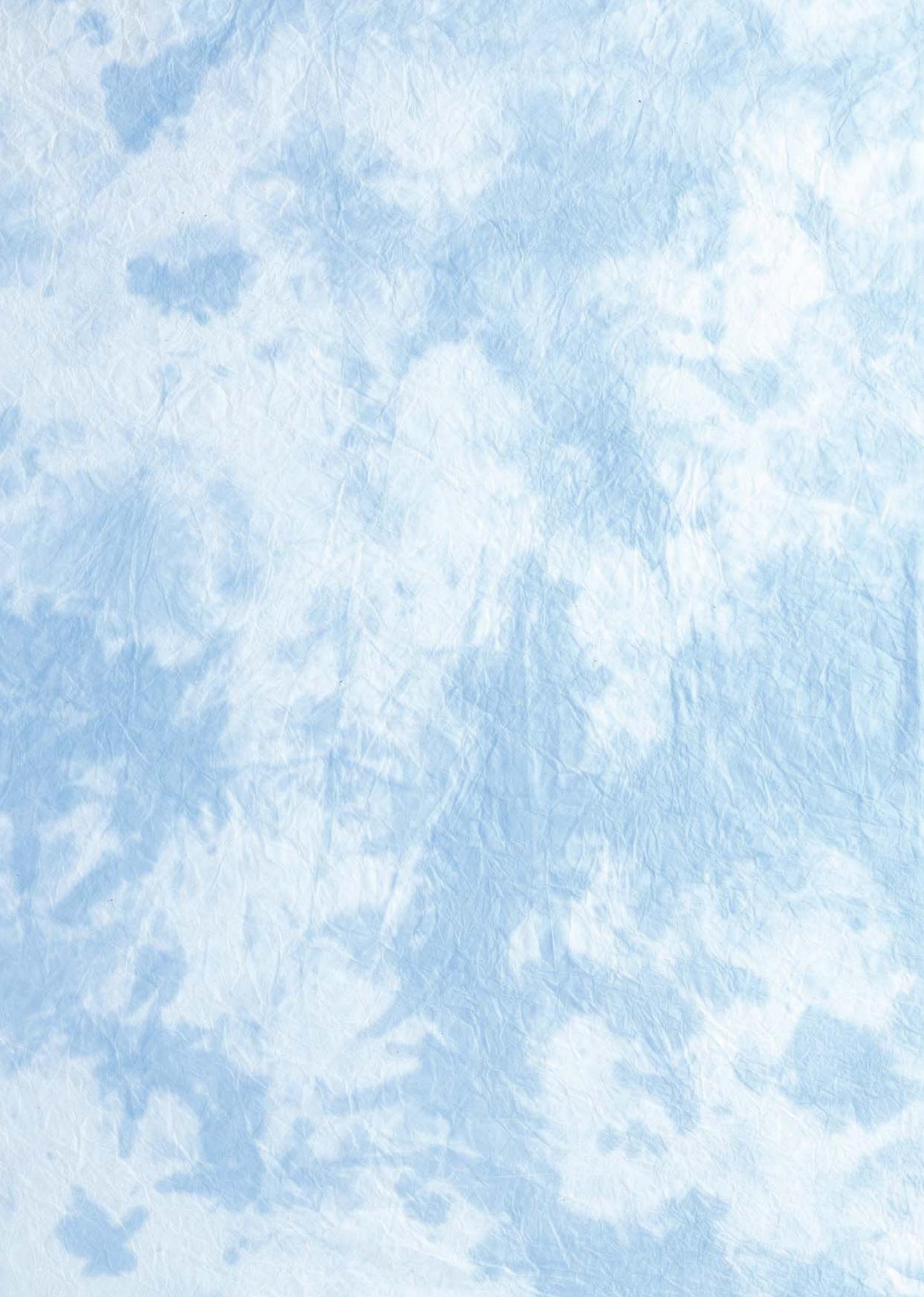
シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」



## 交流拠点活性化事業(マイルポスト)



## 地域連携センター活動



## ■地域間交流事業

### — 陶街道交流フェスティバル開催報告 —

#### 1. 開催趣旨と授業との関わり

##### (1) 開催趣旨

名古屋圏には、さまざまな地場産業がある。代表的なものとして、陶磁器や繊維、和紙、木工などが挙げられる。これらの「ものづくり」は、歴史上、圏域の中心地である名古屋市と深い関係を持って発展してきた。例えば、陶磁器は、堀川で運ばれ、海外へと輸出されていった。また、消費や流通だけではなく、名古屋市の東区を中心に、上絵付けなどものづくりの一端も担っていた。

今日、ものづくりといえば、近代的な産業が中心であるが、こうした伝統的な産業が、再び、活性化することが、名古屋圏の産業や文化の発展につながっていくことになると考えている。

そこで、かつて名古屋市との関係で栄えた陶磁器を、今日的な視点でつなぐ陶街道（生産地と消費地をつなぐ架空の道）の交流するイベントを、名古屋市において開催するものである。

そこで、晩秋の白鳥庭園で、器に関するイベントを開催し、多くの名古屋市民の方々が、瀬戸や多治見市の陶磁器、ひいてはものづくり文化を味わうことを目的としている。

開催概要を整理すると、次の通りである。詳細内容は後で述べている。

■開催日時：11月22日（土）9：00～19：00

（ただし、陶磁器展示のみ24日まで継続して開催）

会 場：白鳥庭園  
主 催：名古屋学院大学  
共 催：白鳥庭園

#### ■開催内容：

##### ① トークセッション

10：30～11：30 トークセッションⅠ

『器の感じ方・楽しみ方』

一の間・二の間

司会：古池嘉和氏

（名古屋学院大学経済学部教授）

今川祐子氏

（市之倉さかづき美術館支配人）

青山 度氏

（度山窯 陶芸家）

三宅京子氏

（NPOたかたおなだ空間デザイナー）

13：50～15：20 トークセッションⅡ

『陶磁器ブランドのこれから』：立礼席

●第一部 ブランドの作り方

●第二部 新せとものブランドへの挑戦

田中章雄氏

（株式会社ブランド総合研究所 代表取締役社長）

水野晶夫氏

（名古屋学院大学経済学部教授）

加藤克己 氏

（有伍春 代表取締役）

鈴木 忠 氏

（有スズカ 専務取締役）

名古屋学院大学学生2名

##### ② 音楽イベント：立礼席

13：00～13：40 第一部 オカリナ演奏

15：30～16：10 第二部 オカリナ演奏

オカリナ演奏グループ『風夢』

（代表：塚本 仁氏）

③ 陶器展示：一の間・二の間 立礼席

メインタイトル：

『こしかた ゆくすえ』

サブタイトル：

『月明かり』（一の間・二の間）

『ハレの器・常のうつわ』（立礼席）

趣旨：陶磁器産業の歴史は、過去・現在・さらに未来へとつながるであろう。さらに、生活の中、人と人をつなぐ大切な場面を演出する最大のモチーフになっている。陶磁器が座を演出するキーポイントになりうる視点を再確認すること。

※ 22日～24日 3日間展示

## （2）授業との関わり

上記の「陶街道交流フェスティバル」を企画実施するにあたり、各陶磁器産地（特に大学が立地している瀬戸や隣接する多治見）の実情や特徴を学習した上で、いかに楽しいイベントにもっていけるかについて、学生のアイデアを引き出すワークショップを開催した。

### 【学生ワークショップ(地域活性化研究A1)】

■日時：2008年7月1日（火）3限 &  
2008年7月7日（月）4限

■内容：名古屋周辺にある各陶磁器産地の  
特徴の学習とイベント計画

■ファシリテーター：

(株)都市研究所スペース  
代表取締役 井澤知旦

学生から生まれたアイデアを整理すると次のとおりである。

### 【展示系】

- ・高級陶磁器の展示
- ・陶磁器のワイングラスの展示
- ・まねき猫でペトロシカのように展示
- ・作品だけでなく土などの材料の展示

- ・庭園など屋外を利用した展示（まねき猫を並べるetc...）

### 【実演】

- ・作陶や絵付け（例えば、招き猫）
- ・ストラップ用の小さな陶磁器（持ち帰り可）

### 【イベント】

- ・料理の皿選びの講座
- ・クイズ、トークショー、オークション（陶磁器にかかわること）
- ・各産地の歴史の紹介
- ・焼物の楽器と使った音楽演奏
- ・若い層を呼び込むためのイベント（例：芸人・参加型）

### 【飲食】

- ・抹茶販売
- ・全ての道具を陶磁器で作り、その空間で飲食

### 【販売系等】

- ・販売
- ・音楽を発信

ワークショップ型授業から提案された学生アイデアを踏まえつつ、実現の視点から再構築した上で、当時開催にもっていった。

## 2. トークセッション

### (1) トークセッションⅠ

#### — 器の感じ方・楽しみ方 —



#### メンバー（右から順に）

三宅京子 氏

（空間デザイナー）

青山 度 氏

（陶芸家）

今川祐子 氏

（市之倉さかづき美術館 支配人）

司会 古池嘉和

（名古屋学院大学経済学部教授）

【古池】 司会を務めさせていただきます、名古屋学院大学の古池です。本日は、本学と白鳥庭園さんとのジョイントによる「陶街道交流フェスティバル」というものを企画させていただきました。

さて、トウカイドウといえば、通常は「東海道」ですが、本日は「陶街道」といたしました。かつて瀬戸や美濃といった陶磁器産地と名古屋とは深いつながりがありました。堀川を使って陶磁器を運んだり、また名古屋の東区には絵付け工場がたくさんあったわけです。ところが、時代を追うごとに、そういったつながりは薄れてきた感があります。そこで、いま一度そうした関係を掘り起こし、「陶街道」で結んでみようというのが趣旨です。

まず、「トークセッション。」では、美濃焼を中心に、「器の感じ方・楽しみ方」というテーマで、陶芸家の青山度先生、市之倉さかづき美術館支配人の今川祐子さん、空間デザイナー

の三宅京子さんの3人のパネリストからお話をうかがいます。

トップバッターとして、青山先生、まず美濃焼の特徴についてお話しいただけますか。今日は、青山先生の作品も展示させていただいておりますが…。

#### ●美濃焼は特徴がないのが特徴



【青山】 実は、美濃焼の特徴というのは、特徴がないのが特徴なんです。皆さんの周りにはたくさん焼物があると思いますが、その6～7割は美濃焼だと思います。それで、特徴がないからこそ、手に馴染み、いつまでも使っていただけるのだと思います。や

はり普段使うものは、この器いいな、このご飯茶碗は食べやすいな、口にあてたとき口に合うな、といった感じで選んでいただけるといいんじゃないか。

私はカメラが大好きです。ドイツ製のライカはすごく手に馴染むんですね。これは100年、150年経った今でも、ねじ1本から手作りしていて、ドイツに送れば不具合も直してくれます。私もそんな陶器を作りたいと思って、一つずつ、ろくろをひいて作っています。原料の土も山へ行っ自分で採ってきます。その土に、ベルギーから来たコバルトと、やはり山で採ってきた鉄を入れて、そうやって私は青い色を出しているんです。作り手の立場から言うと、そんなことも感じ取っていただければ嬉しいです。

【古池】 美濃焼の産地は13～14ほどに分かれており、そのエリアは多治見、土岐、瑞浪、可児と4市にまたがるほど広いですから、その特徴

を一言で言うのは難しいですね。

さて、市之倉は盃の産地です。そこにある市之倉さかづき美術館の支配人で、まちづくりという視点で活動されている今川さんからお話をうかがいたいと思います。

### ●美濃焼は何でも作れる

【今川】 焼物というのは、陶器と磁器に大きく分かれていますが、美濃焼は両方を扱っています。また、焼物の技法や原材料はいろいろありますが、美濃焼には志野、織部、黄瀬戸、染付けなど様々な技法があり、また原材料も種々あるので何でも作れます。それが全国に出回っている器の半分以上を美濃焼が占めている所以です。また、タイル等の建材、電化製品にも焼物は使われますが、その半分以上は美濃焼です。逆に言えば「これこそ美濃焼」というものがなく、結局、「特徴がない」というわけです。

さて、多治見市の一番端で瀬戸に隣接するところに市之倉はあります。ここは明治の頃、瀬戸から磁器の技法が伝わってきたときに、それ

まで陶器を焼いていた窯が一斉に磁器用の窯へと変わりました。市之倉は非常に交通の便の悪い所でしたので、盃とか玉露用の煎茶器、箸置き、スプーン、レンゲなど小さなものを大量に作る産地として発達したんです。

【古池】 現在、今川さんたちを中心に、市之倉の「市」、高田の「高」、笠原の「笠」をとった「市高笠プロジェクト」というのが進められているわけです。笠原には作家の立原正秋も愛飲したという銘酒「三千盛」があります。その酒と酒器をセットにして「美濃陶酔」というブランド開発に現在取り組んでおられますね。その話をうかがいたいのですが…。

### ●産地の特徴を生かし、産地同士をつなぐブランド開発

【今川】 2006年、多治見市に笠原町が合併で加わったのをきっかけに、NPOたかた・おなだ代表の加藤由弥子さん、市之倉代表の私、笠原の三千盛の社長さん、市之倉の幸兵衛窯の作家



である加藤亮太郎さん、多治見市役所とで新しいブランドづくりを進めることになりました。

まずは商品開発から始めました。それぞれの産地の特徴を生かすということで、高田は保温性のある高田土で爛鍋という酒を注ぐ器を作



り、市之倉では盃を作り、笠原の三千盛にはお酒を提供してもらうことになりました。ただ、酒器揃いを作るだけでは珍しくもないので、うんちくをたくさん盛りこんで、テーマは「酒に合う器」、「器に合う酒」とし、一方が景品になるのではなく、お互いに引き

き立て合う関係にしたいと考えました。

爛鍋は直接火にかけるものですが、爛鍋という酒器を知らない人も多いので、これで酒を飲むのもオシャレだとアピールして、食卓に置くスタイルにしました。磁器の平盃を作りました。陶器だと熱燗を注いだとき土の香りがお酒に混ざってしまうので、お酒の味を変えないために磁器にしました。また、平盃のように開いた形だと口が一文字になって舌全体にお酒が広がり複雑な味が感じられるのです。そしてお酒は、ほんのり温めることによって熟成された深い味わいや香りがすごく引き立つ、三千盛のなかでも純米大吟醸の五年熟成酒を使いました。注ぐ側と受ける側とお酒が噛み合っが一番美味しくお酒をいただけるスタイルの提案、これが「美濃陶酔」です。余所の地区と様々に情報交換しながら、それぞれの得意分野を生かして新ブランド開発に取り組んでいるところです。

**【古池】** 「美濃陶酔」はまちづくりから生まれたブランドとも言えますね。では、本日この場のしつらえをされた三宅さんから、展示の見ど

ころ、コンセプトをご紹介しますか。

### ●新たなチャレンジが古きよきものを伝えていく

**【三宅】** 今回は、「こしかたゆくすえ」という少し古めかしいテーマでの展示を考えました。これには、若い人たちにはこれから先、様々な展開があるという思いを込めました。また、日本庭園なので和のテイストが合うわけですが、やはり和だけでは広がらな



いと思い、洋のテイストも加えることにしました。それで、今日は「温故知新」をローマ字で描いたカリグラフィの作品を置いてみました。そうすることで、ここにはどんな人も集うことができるような雰囲気が生まれたと思います。また、この空間にある和紙、水引、藍染めなどはすべて、メイド・イン・ジャパンです。日本の手業がずっと続いてきたのは、やはり新しいチャレンジがあったからであり、そしてこれからも続いていくだろうという思いを込めました。

もう一つ申し上げたいのですが、実は、1800年頃、津金文左衛門という熱田の奉行がこの場所で初めて染付けの試作をさせたのです。それが瀬戸で完全に昇華され、その技術が瀬戸から市之倉の方へ渡り、そして現在、青山先生が染付けを作っておられるというわけです。

### ●美濃と名古屋の関係

**【古池】** 名古屋と美濃との関係で思い浮かぶことはありますか。

**【青山】** いまは美濃焼と言いますが、かつて美濃焼はすべて瀬戸物と呼ばれていました。瀬戸

の商人が買って、そして瀬戸から名古屋へ、名古屋から東京などへ出ていったんです。

**【今川】** 名古屋の御器所（ごきそ）とか呼統（よびつぎ）とは器が縁のつながりがあります。私は「金継ぎ」という陶磁器の直しをやっています。特に、別の器の破片を継ぐことを「呼び継ぎ」といって、結婚式の引き出物などに使われますが、違う器の破片同士が一つの器になって長く続くということ縁起がいいからです。器を大事にする心とか技術の継承を含めてつながりを持ち続けたいと思っています。

### ●質疑応答

**【古池】** では、会場の皆さんからのご質問とかご意見をいただきたいと思います。

**【会場A】** 水を入れるとじわっと漏れてしまう花瓶がありますが…。

**【今川】** 氷が割れたみたいに貫乳というひびが入っている器にコーヒーや醤油など濃い色ものを入れると色が付いてしまいます。これは欠陥商品ではなくて、そういう特徴がある器だということを知って楽しんでいただきたいわけです。欠けたり割れたり茶渋がついたり、そういう経年変化を味わうのも楽しみ方の一つかと思えます。

**【青山】** 昔から有名なものとしては「雨漏り」というお茶碗がありますが、長く使っているうちに水がしみこんで雨漏りのような染みができるんです。そういうことも器の変化として見て、楽しんで使っていただければと思います。

**【会場B】** 料理を美味しく感じる食器の色とか素材というものはありますか。

**【今川】** 暖色系とか土の温かい色は料理を美味しく見せるとか、青など寒色系の器だとあまり食が進まないとも聞きますが、最終的には好み次第でしょう。

**【会場C】** お猪口は小さな器なのに、茶碗や湯飲みに比べて値段がちょっと高いように感じますが…。

**【今川】** 今でこそ日常的にお酒を飲みますが、一昔前は貴重品でした。また、お酒は神事や祭事など儀式で使うもので神聖な意味がありましたから、そのための器は日常食器よりもやはりちょっと高いという傾向はあります。ちなみに、酒を注ぐ器には、盃、お猪口、ぐい飲みがありますね。盃は「酒のつき＝器」であり、お猪口は猪の口の形、ぐい飲みは、手酌酒用です。

**【古池】** 形や名称によって使い分けがされ、メッセージが込められているわけですね。

さて、陶磁器というのは器だけではなく、実は楽器もあります。ということで、本日はこの後、オカリナの演奏を予定しております。陶磁器の様々な面を感じ、楽しんでいただきたいと思えます。

以上で、「トークセッションI」を終了させていただきます。ありがとうございました。

## (2) トークセッションII —陶磁器ブランドのこれから—

### メンバー

田中章雄 氏  
(株)ブランド総合研究所 代表取締役社長)

加藤克己 氏  
(有)伍春 代表取締役)

鈴木 忠 氏  
(有)スズカ 専務取締役)

MC 杉瀬佳奈子さん  
(名古屋学院大学在学学生)

鈴木達也さん (名古屋学院大学在学学生)

梅田陽太さん (名古屋学院大学在学学生)

司会 水野晶夫  
(名古屋学院大学経済学部教授)

### 【1】ブランドの作り方

【水野】 皆さん、こんにちは。名古屋学院大学の水野です。「トークセッションII」では、「陶磁器ブランドのこれから」というテーマで話を展開していきたいと思えます。

さて、スギセさんは、ブランドと聞いて何をイメージしますか。

【杉瀬】 ヴィトンとかグッチとか、高価で上品なもの、というイメージがあります。

【水野】 なるほど。では、コンビニに並んでいるペットボトルで、ラベルが貼ってあるものと貼ってないものがあつたら、どちらを買いますか。

【杉瀬】 もちろん、ラベルが付いている方です。安心して飲めますからね。

【水野】 このメーカーのものなら安心して飲めると信用させるのは、ブランドの力ですね。そこで、本日は東京から日本のブランド研究・開

発の第一人者である(株)ブランド総合研究所の田中章雄先生をお招きしました。田中先生は全国各地のブランド開発に関わっておられますね。

### ●こだわりや努力がブランドを作る

【田中】 実は今、瀬戸で陶磁器製の「究極のピアカップ」づくりを進めています。究極のピアカップは誰が注いでも黄金比7対3の割合できれいな泡ができるピアカップです。なんと2脚で1万円もしますが、人気があるようです。やはりブランドというのは、高くても買いたい、一度でいいから使ってみてみたいと思わせるものですよ。また、ラベルを見た瞬間、このメーカーのものならきっといいと思わせるものでなくては行けない。それで、何故いいのかと聞かれたら、「こういうこだわりがあるんだよ」という説明ができることが肝心なんです。

ちなみに、今やブランドの世界は、例えば、ハーレーダビッドソンの「ドッドドドッ」という音も、香水のシャネル10番の香りも商標になっています。また、不二家のペコちゃん人形のような立体商標もあって、ブランドというのかなり意味合いが変わってきました。今日は、そのなかでも特に、「地域ブランド」についてお話ししたいと思います。

【杉瀬】 地域ブランドというと、やはり食べ物が思い浮かびますね、夕張メロンとか。

【田中】 夕張メロンは昨年、史上最高値がついて、2個で200万円でした。これは札幌の百貨店が購入し、1個100万円で販売されました。スゴイと言われることによって夕張メロンの価値は高まり、百貨店にも多くの人が集まるというように、様々な効果が生まれるわけです。

実は、他にもすごい地域ブランドがあります。イチゴは普通、1パックが500円前後ですが、徳島県の佐那河内村で作られている「ももいちご」というイチゴは、日本で一番大きい「究極のイチゴ」と言われ、1パックが16,000円です。



イチゴは一つの苗に20~30個の実をつけるものですが、ももいちごの場合は一つの苗で5粒しか作らないようにしています。また、実が大きくなると、すのこの上に乗るようにして、毎日2回実を回転させるんです。そのくらい手間をかけて育てているんです。

**【水野】** こだわりの裏では大変な手間をかけているということですね。

**【田中】** また、高知市に徳谷という地域があって、そのフルーツトマトは日本で最高のトマトと言われています。メロンの糖度は14度、通常のトマトは5~7度、そのフルーツトマトは12度と甘いんです。ピンポン球くらいの大きさで、1個が1,500円です。なかなか手に入らないようです。

### ●ブランドとは使う人の心も豊かにするもの

**【田中】** 徳谷という地域は、川の水と海の水が混ざる汽水域なんです。塩分のある土地には普通、植物は育ちませんから、そのトマトも塩分から自分の体を守るために、体内の糖度を高めるんです。さらに、作る側は徹底的に甘くしようと、毎日塩水をまいたり手間暇かけて、糖度12度以上のものだけをフルーツトマトという名前で売っていますが、それは全収穫量の2%なの

で、希少価値があるわけです。

普段はグラスのコップだけど、祝い事とか来客のときにはちょっとお洒落なカップを使おうとか思う。それで、陶磁器で飲むビールは味がマイルドだね、なんて発見もします。結局ブランドというのは、それ自体がいいだけでなく、それを使う人の心も豊かにするものなんです。

**【水野】** そういったこだわりのブランドって、どう作っていけばいいんでしょうか。

**【田中】** 一つは、他の商品にはない魅力をつくらなければいけないと思います。だから、他にはない甘いトマトとか、他にはない大きさのイチゴを作る。手間をかけて、努力して他と違う、いいものをつくる。これがブランド作りには必要ですね。

### 【2】新せとものブランドへの挑戦

**【水野】** では後半は、いま話に出ていたビアカップづくりなどに取り組んでいる、究極のせとものプロジェクト開発メンバーの加藤克己さんと鈴木忠さんに加わっていただいて、現在の取り組みについて話をお聞きしたいと思います。学生のウメダ君とスズキ君にも加わってもらいましょう。

## ●瀬戸焼のブランド化に取り組む

【鈴木(忠)】 瀬戸では2005年の愛知万博を契機に、自分たちの焼物や瀬戸市を全国にPRしようと、商と工が初めて手を組みました。焼物の代名詞といわれるほど有名な瀬戸焼が、ブランド化に関しては非常に立ち遅れているということに気づきました。瀬戸焼というと安物とか生活雑器ぐらいであって、「いいもの」というイメージとはかけ離れていたわけです。そこで田中先生にお願いして、僕らは「お茶プロジェクト」、「オートクチュールプロジェクト」、「瀬戸基準プロジェクト」という3つのプロジェクトを立ち上げて、瀬戸焼のブランド化に取り組み始めたわけです。

【水野】 若い人たちも瀬戸物は知っていると思うけれど、瀬戸焼はどうですか。

【鈴木(達也)】 瀬戸に住んでますが、あまり瀬戸物には興味がなくて…。

【梅田】 言葉を聞いたことはありますが、実際に見たことはないですね。

【加藤】 オートクチュールプロジェクトのチームでは、毎回、田中先生にたたかれて、その度に仲間とビールを飲んでいたので。それで、どうやったら楽しく飲めるのか、どうせ飲むならもっと美味しいビールを飲もう、と考えるようになりました。そんななか、ビール会社にお邪魔していろんなコップで試飲したところ、自分たちが思っていたビールのコップのイメージが完全に覆されたんです。そこのマイスターも、何故こういう形をしているかとか、いろいろ教えてくださいました。そういうことがあって、田中先生に「究極のビアカップを作りたい」と言ったら、初めて先生は褒

めてくださいました。そこから「究極のビアカップとはなんぞや」と考え始めて今に到っています。

【水野】 学生諸君はどう思いますか、このビアカップ。

【梅田】 居酒屋だとグラスで出てきて水滴が落ちるのが気になるけれど、これは下にコースターが付いているからテーブルも濡れないし、コースターは外すことができるので、つまみ入れにもなるし…。

【鈴木(達也)】 誰が注いでも、泡が必ず7対3という黄金比になるのがすごいですね。

【田中】 いま瀬戸では、水出し煎茶専用の急須を作っています。使うお茶葉は普通のものではなくて、伊勢の方で作っている「かぶせ茶」というものです。伊勢茶と瀬戸がコラボレーションして、冷たいお茶を淹れて飲む文化を広めようというわけです。

## ●ものだけでなく、文化をつくる

【田中】 ということで、実はいま瀬戸で取り組んでいることは、単なるものづくりではなくて、



文化づくりなんですね。ビアカップづくりにしても、器を作るだけでなく、ビールの美味しさを味わう、またビールを飲んでいる状況全体を楽しくしようということなんです。

**【水野】** わくわくしてきますね。ものづくりと同時に文化をつくっていくということ。そして、それを楽しむということですね。

**【田中】** 千利休が茶の湯を始めたときは、器もクローズアップされたわけです。また、器だけでなく、華道や建物など周り全体に気を配った。そして礼儀作法、あるいは生き様まで全部含めて茶の世界は出来上がっている、としたわけです。器とは本来、そこまでのパワーを持っているものだと思います。つまり、ライフスタイルとか考え方までつくっていくことが必要になるんです。瀬戸ではそういうことを踏まえた人たちが集まって究極のものづくりに取り組んでいるんです。

結果的に瀬戸物は安物の代名詞になってしまったわけですが、いまや安いものは中国などアジア諸国にとって代わられてしまいました。ならば、もう安いものを作るのはやめて、こだわりを持って安心して使える、使っている人の心が豊かになるようなものづくりをしよう、というふうな考え方に切り替える時期ではないか。今回の取り組みが、まさにきっかけになるのではないかと期待しています。

**【鈴木(忠)】** このプロジェクトがこけたらもう瀬戸はだめになるんじゃないか、というぐらいの意気込みで我々は取り組んでいるんです。

**【水野】** 僕たちも応援していますので、是非いいものを作ってください。

以上で、「トークセッションⅡ」を終了させていただきます。ありがとうございました。

### 3. 陶磁器展、オカリナ演奏他

#### (1) 陶磁器展

この陶磁器展の主旨は、陶磁器産業の歴史は、過去・現在・さらに未来へとつながることを展望すること、さらに、生活の中、人と人をつなぐ大切な場面を演出する最大のモチーフになっていることから、陶磁器が座を演出するキーポイントになりうる視点を再確認すること、にある。

よって、メインタイトルおよびサブタイトル

は次のとおり設定した。なお、しつらえは空間コーディネーター三宅京子氏によるコーディネートである。開催期間は11月22日～24日の3日間である。

メインタイトル『こしかた ゆくすえ』

サブタイトル 『月明かり』(一の間・二の間)、  
『ハレの器・常のうつわ』(立礼席)

なお、関連して芝生広場において、『瀬戸・究極のせとものプロジェクト』開発商品(例えば、カレー皿)の展示等を行った。



立礼席の展示「ハレの器、常のうつわ」



立礼席の展示



一の間・二の間「月明かり」

## (2) 音楽イベント—オカリナ演奏—

オカリナ演奏を立礼席においてオカリナグループ「風夢」によって執り行われた。演奏は第一部（13：00～13：40）と第二部（15：30～16：10）で構成し、それぞれ40分とした。

「風夢」とは塚本仁氏を代表とするオカリナグループである。

豊田市藤岡地区の特産品であるオカリナを多

くの方に知ってほしいとの思いから、平成16年に有志が集まって作られた。翌17年には、愛・地球博の市町村デー『豊田市の日』で約700人の市民オカリナ隊の中心として、その一翼を担った。また、その後生まれたオカリナグループの指導を行うかたわら、現在では地域のイベント、ボランティア活動、独自の演奏会を行うなど他方面で活動している。



## ■地域間交流事業

# シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」

### 1. 「瀬戸ノベルティの魅惑！ 瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみち」展の開催

「瀬戸ノベルティの魅惑！ 瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみち」展が、2月14～22日）に3者（瀬戸ノベルティ文化保存研究会、名古屋陶磁器会館、なごや歴史ナビの会）の主催で、名古屋陶磁器会館にて開催された。



この企画を推進した「瀬戸ノベルティ文化保存研究会」（代表：中村儀朋）は、同産業をモデルにした『現代産業に生きる技—「型」と創造のダイナミズム—』（十名直喜著、勁草書房、2008年）の出版を機に立ち上げたもので、著者も会員の一人である。瀬戸ノベルティの産業文化を継承し、陶磁文化によるまちづくりができればといった思いを共有する陶磁器関係の経営者や職人、デザイナー、商店街経営者、コレクター、一般市民、研究者など多様な人たちで構成されている。



1月半ばに急遽、浮上した展示企画「瀬戸ノベルティの魅惑！ 瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみち」（名古屋陶磁器会館、2月14日～22日）を詰めるために、1月28日の夜、10数人が集った。ガランとした工場空間、19時から22時過ぎまで寒さの沁みるなか、熱い議論と思いに包まれた3時間余でした。瀬戸ノベルティの魅力の名古屋の市民に広く知ってほしい、そうした交流を通して瀬戸の陶磁器産業を元気づけたいとの思いが込められている。

こうした市民の思いは、大きな関心呼び起こし、共鳴と交流の輪を広げていく。当初は、「今どき回顧展などやってどうする」といった声も聞かれた。しかし、「温故知新」の大切さ、とりわけ産業文化として捉え直すことが21世紀型産業としての再生の出発点になるという理解を得るに至る。瀬戸市やとうめい新聞、NPO法人・檀木倶楽部などからの後援に続き、日本陶磁器産業振興協会、愛知県陶磁器工業協同組合、瀬戸陶磁器工業組合、瀬戸原型陶彫会、さらに名古屋や鳥取のNPOやクラブなどからの後援を得て、協力の輪はさらに大きく広がった。発起から開催まで1ヶ月にも満たなく、まさに

走りながらの手づくり準備だった。幸い、瀬戸と名古屋の両都市を中心に多くの関係機関のご後援を得、マスコミや関係者のご協力をいただき、多彩な企画と展示に囲まれるなか1,200人を超える来場者に恵まれるなど、盛況裏に幕を閉じることができた。

## 2 シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」の企画

シンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」は、この展示会の特別セッションとして設けられたものである。開催前日の夕方に開かれた（名古屋学院大学）都市政策プロジェクト研究会で、展示会の紹介をしたところ、「瀬戸と名古屋にキャンパスを持つなど歴史的なつながりの深い本学の研究・教育活動の趣旨と合致するので、期間中にシンポジウムを開催してはどうか」との提案をいただいた。そこで夜中に企画し、関係者に諮って固めたのは翌14日の展示会場（初日）においてである。

シンポジウムは、3者（名古屋学院大学、瀬戸ノベルティ文化保存研究会、名古屋陶磁器会館）の主催という形にした。せっかくの展示会なので、実物を観るだけでなく、その背景に潜む本質的なもの、経営、技術、思いなどを紹介できればというのが、シンポジウムの趣旨であり狙いである。

## 3 ノベルティに囲まれてのシンポジウムが紡ぎだす知的・文化的な固有空間



2時間以上におよぶシンポジウム「瀬戸ノベルティの魅惑！ 陶磁文化のみち」（2月20日）は30数人の参加を得て、瀬戸ノベルティの秘められた魅力と可能

性、課題について、多様な視点から自在に語り合い、知的に交流する得難い場となった。



足りない椅子などは急遽、市内および瀬戸から持ち込んでいただいた。パネリストの布陣も加藤工芸(株)の加藤勇夫会長を加えて、4人への拡充を直前に決めるなど、まさに手づくりで走りながら整備するなか、スタートした。

開会あいさつ（古池嘉和・名古屋学院大学教授）の後、コーディネーター（十名直喜・同左）から、本稿とレジュメ（「名古屋と瀬戸をつなぐ陶磁文化交流」）に基づき、基本的な枠組みと視点を提起した。まず、世界史的な磁器交流の大局（4つの流れ）のなかで、瀬戸ノベルテ



ィの過去・現在・未来を位置づける。次に、瀬戸と名古屋をつなぐ陶磁文化のみちについて、名古屋圏とくに名古屋における近代セラミックス産業の成立・発展、そして名古屋から瀬戸への産業展開を概括する。それらをふまえ、瀬戸と名古屋をつなぐ新たな架け橋とそれが秘める（まちづくりと産業再生の）可能性について提起した。



4人のパネリスト（瀬戸側、名古屋側から各2人）からは1時間余にわたり、瀬戸ノベルティと陶磁文化を軸にして自在に語っていただいた。まず、中村儀朋（瀬戸ノベルティ

文化保存研究会代表）さんより、瀬戸ノベルティの魅力について、「集団就職」調査のなかで発見した経緯、日本のオンリーワンとしての価値、それをどのように生かせるかなどを語っていただいた。次に、池田洋幸（瀬陶工副理事長、池田丸ヨ代表取締役）さんは、自社の歴史的な歩みを俯瞰され、逆風に抗しての新商品（万博のアイテムなど）開発、そしてご息子との二人三脚などについて披露された。

名古屋側からは、まず小椋寿紀（名古屋陶磁器会館事務局長）さんが、当会館の歴史的な歩みについて概観され、瀬戸と名古屋の陶磁文化交流を通して会館の難局を乗り越り



発展させたいとの抱負を述べられた。次に、79歳にして現役の加藤勇夫（加藤工芸株会長）さんから、当社の設立から現在まで60年にわたる経営の歩みとノベルティへの熱い思いを語っていただいた。「型が一番大事」と明言され、今も4人の原型師を社内で抱えているとのこと。名古屋で原型をつくり、中国でつくらせるという経営方式を維持しつつ、中国での模倣問題などと苦闘されているご様子がリアルに伝わってきた。

会場の出席者からも、発言を得ることができ

た。生産停止から20年余の今も、膨大な各種製品や「型」などの保存に努められている加藤豊（丸山陶器株会長）さんより、その熱い思いの一端を静かに語っていただいた。また、池田丸ヨ株の若き継承者・池田圭（同社企画部長）さんから、逆風のなかノベルティ事業の継承に飛び込んだ思い



や、新しい感性と技術をつないで切り開いていきたいとの抱負などを、熱く語っていただくことができた。こうして2時間を越えてなお名残

惜しさを感じつつ、盛況裏にシンポジウムを終えた。アフター・シンポのフロアで、「感銘深いシンポジウムでした。展示品も素晴らしく、こうした場を一緒につくっていききたい」（田村哲・愛知陶磁資料館学芸員）との言葉もいただいた。

また、別室にて即席で設けられた茶話会（もう一つのアフター・シンポ）にも、関係者など10数人が集った。シンポジウムで語り残したことや、名古屋陶磁器会館の展示様式に新たな工夫・進展がみられるこの数日間の背景、さらには加藤豊子（当館スタッフ）さんによる修復技術の説明、それを聞いての「内にお願ひしたいものが一杯ある」といった商談話などへと飛び火する。そうしたワイガヤに時間を忘れて盛り上がるなか、ようやくにして会を閉じ、そのインパクトと余韻のただならぬものを味わいつつ帰途についた。





### 3 シンポジウム冊子の編集・発行

「シンポジウムの記録を何とか残したい」、「瀬戸と名古屋のまちづくり、そして地場産業再生の活動に少しでも役立つ形にまとめたい」。そうした思いを胸に、パネリストをはじめ関係者のご協力を得て編集を行い、冊子にまとめた。テープ起こしを基に、文章を整え、小見出しを付けるなど、少しでも読みやすいようにと心がけた。臨場感を共有できるようにと、プロカメラマン堀正雄さんの見事な写真も織り込ませていただいた。

この冊子は、文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラムの支援を得て出版した。学内の関係者のみならず、瀬戸市や名古屋市の行政機関、図書館、大学、（名古屋陶磁器会館などノベルティの展示に関わる）博物館、（瀬戸ノベルティ文化保存研究会など）研究会・クラブ・NPOなどに、まとまった冊数をお送りし活用していただく予定である。

## ■交流拠点活性化事業

### マイルポスト・プロジェクト

#### ○マイルポスト・プロジェクトとは

学生運営の店舗（マイルポスト）運営を通じて社会貢献を推進していく「まちづくり推進プロジェクト」で、2002年から2007年までのマイルポスト・瀬戸プロジェクトと2008年からのマイルポスト・名古屋プロジェクトからなる。

瀬戸プロジェクトでは、活動当初、シャッター通りであった銀座通り商店街が、2006年には経済産業省「がんばる商店街77選」に「大学連携」の評価を受けて選出されるまでに活性化した。その実績等から、2007年度文部科学省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）に、本学の『「地域創成プログラム」の実践』が選定されている。2007年10月に名古屋市との連携協力協定を締結した後、マイルポストの名古屋市での再開を決定し、2008年1月に熱田区日比野商店街の空き店舗を活用して「カフェ&ベーカリーマイルポスト」をオープンした。

#### ○マイルポストの役割

この新プロジェクトは、「地域創成プログラム」のうち「交流拠点の活性化」の中心的な役割を担っている。通常は、ベーカリーカフェの営業を行っているが、まちづくり・コミュニティビジネスの視点からさまざまな社会貢献活動を行っている。

コーヒーおよび雑貨はフェアトレード商品を取り扱い、またレジ袋辞退者には、エコポイントを発行、EXPOエコマネーとして貯めることもできる。

さらに、店舗では随時カフェイベントを企画・開催し、地域共生・地域創造に向けたさまざまな実践活動も行っている。



## ■2008年度活動概要

### ○熱田区とのまちづくり連携事業

#### 1. 熱田区：あつたか交流サロン「パン作り教室」

熱田区役所、熱田区内ボランティア団体、大学・学生からなる実行委員による運営とし、8月から12月までの4回、親子向けのパン作り教室を開催した。



#### 2. 熱田区・あつたか交流カフェサロン

熱田区役所主催の講演会を、マイルポストで軽食付きで行なっている。通常の講演会場とは違いリラックスして参加し交流の場となることを目的に、2008年11月20日「転ばぬ先のツエ（骨粗しょう症の話）」、2009年1月20日「甘〜い、誘い、あなたならどうする？（消費生活のトラブルの話）」を開催した。



#### 3. あつたかミニミニ福祉フェスタ 2009年3月22日

「来て・見て・つながる」をテーマに、熱田区、熱田区社会福祉協議会、大学との共催事業で、区内福祉施設の自主製品の逸品販売を開催した。活動パネル紹介、試飲・試食会、子供向け出し物なども併せて実施し、集客・交流を図った。



## ○商店街活性化事業

### 1. 長浜・黒壁視察ツアー 2008年9月15日

日比野商店街・行政・地域の方々と学生との交流を深める目的で、滋賀県長浜・黒壁スクエアの視察ツアーを行った。現地では、まちづくり役場サポーターによる講演を聴き、各班に分かれて散策した。



### 2. 日比野商店街「8の日清掃」

毎月8日を“8の日清掃”とし、朝8時より、日比野商店街・地域の方々と学生で、日比野交差点周辺の清掃活動を行っている。この活動が評価され、2008年5月、日比野商店街は名古屋市商店街振興組合連合会「地域貢献・特別賞」を受賞した。



### 3. ひびのこイまつり参加 2008年4月13日

日比野商店街振興組合主催の年1回の大イベント「ひびのこイまつり」。企画段階からイベント運営まで学生が関わり、まつりの活性に携わった。また、瀬戸商店街の一品逸品を販売し瀬戸・名古屋間の交流を図った。



### 4. 『日比野タウンズ』 2009年1月8日（創刊準備号発行）

日比野商店街活性化事業の一環として継続的に発行を計画。①提案公募制で各個店の旬な取り組みを応援する仕組み②買い物客の回遊性を高めるスタンプラリー制③地域イベントの情報提供を目的として、マイルポストチームが創刊準備号を発刊2009年1月に発刊した。



## ■地域連携センター活動

2007年4月に名古屋キャンパス（名古屋市熱田区）を開設するにあたり、地域連携センターは同年1月に「名古屋市・瀬戸市等との地域貢献」を目的に設置された。

キャンパス開設後まもなく、地域連携センターは名古屋市とまちづくりを推進していくために協議を開始し、同年10月1日、大学と名古屋市との間で、「商店街の振興、観光の推進、まちづくり」などに関する包括的な「連携協力協定」を締結した。協定に基づき、「名古屋学院大学・名古屋市地域連携協議会」が設置され、2008年6月には、実際の活動の場となるキャンパスが立地する熱田区において、「熱田区まちづくり協議会」のもと「大学との協働まちづくり専門委員会（以後、委員会と記載）」が設置された。

委員会の設置目的は、「熱田区の魅力向上、安心安全で快適なまちづくり」活動を通して、情報交換や人の交流、事業の実施によって相互に連携協力して、地域社会の発展に寄与することである。名古屋市の中でも高齢化が顕著な熱田区にあって、本学は初めてできた大学であり、活気がなくなりつつある商店街はもとより、まちぐるみの活性化を目指すための待ち望んだ存在であった。本学としても、知的資源を市民に提供することで地域に貢献するとともに、教育の観点から、学生が地域貢献活動を通して市民と交流し、人間的に成長することを期待するものであった。

委員会のメンバーは、区や区民、地元ボランティア団体、本学の教職員・学生からなる総勢27名である。本学からは、教員4名、事務職員2名、学生3名（学生自治会・大学祭実行委員会・マイルポスト店長）が参加し、委員会の3分の1を占め、専門知識をもった大学の教員とアイデアと行動力のある若者に期待する構成となっている。

2008年度における委員会の活動で、本学が直接関わった事業は次のとおりである。本学が名古屋市熱田区で活動を始めた2年目を迎え、まちづくり活動を推進する上で不可欠な地域プラットフォームを組織化できたことは大きな成果といえよう。

### （1）あつたの魅力向上・魅力発信事業

#### ①大学と熱田生涯学習センターとまちづくり連携講座（前後期各2回）

前期教養講座／歴史と伝統から見たアジアの展望～アジアの中の日本を考える～（6回）

前期まちづくり講座／わたしたちで「あつたの情報誌を創っていこう！」（5回）

後期教養講座／チャイナ再考～中国の現状を考える～（6回）

後期まちづくり講座／住みよいまちを考えていこう！（6回）※

※大学・都市センター・生涯学習センター・区役所連携講座

以上の4つのテーマ講座について、本学の教員・教室を中心に開催した。

#### ②熱田区区民まつり

10月4日に開催した。総勢30人の学生が、会場設営、スタンプラリー受付、ステージ演奏、堀川ガイドボランティア、会場警備・清掃ボランティアで活動した。

#### ③陶街道交流フェスティバル

11月22日に開催した。大学の隣地である白鳥庭園（会場）と連携し、陶磁器産地である瀬戸・美濃・多治見と、その最大消費地である名古屋とを結び、産地と消費地の連携を促進することで、陶磁器を媒体とした地域間の交流と連携のイベントとなった。

#### ④熱田区区民のつどい

12月16日に開催した。「熱田区区民のつどい～住みたくなるまち あったか熱田をめざして～」4年に1回の各区持ち回りの区民集会。これまでのまちづくり活動を振り返り、未来へ続くまちづくりを考えることを目的とする。シンポジウムにおいて、本学教員がコーディネータ、学生がパネリストとなり発表。また、まちづくりの実績をパネル展示コーナーで紹介した。



## (2) 異世代交流・次世代育成事業

### ①夏休みこどもスポーツ体験教室

8月6～8日に開催した。区内小学校4～6年生各30人が参加。体育館において、希望する「空手・卓球・バドミントン」のうちの1種目を、本学の各クラブ学生および関係者が指導した。

### ②あったか交流サロンの開催（マイルポスト）

その事業は「親子パン作り教室」「カフェサロン」「ミニミニ福祉フェスタ」に分けられるが、すべて本学のアンテナショップ「カフェ&ベーカリー マイルポスト」で開催された。その他、「日比野商店街清掃活動」「ひびのコイまつり参加」「日比野商店街活性化事業検討委員会始動」「日比野タウンズ発行企画開始」など地元商店街の活性化事業を展開した。

### ③大学・都市センター・生涯学習センター・区役所連携まちづくり講座

「住よいまちを考えていこう!」という座学とフィールドワークを交えた連携講座（全6回講座）を開催。講座終了後、受講生・関係者が協力し、「まちづくりNPO“日比野ひとまちネット”」を立ち上げた。今後、日比野地区の活動の中心となり、広く活動を展開していくことになる。



※ 地域連携センターは、委員長はじめ、経済学部・商学部・外国語学部・人間健康学部から各2名の教員、および総合政策部（担当部署）と瀬戸キャンパス事務局からの職責事務職員の計12名で構成される。

# 今年度事業の評価 ●●●●●

本年度事業の取り組みは大きく①「地域創成プログラム」実践授業と②もの・まちづくり事業の二つからなる。

## (1) 「地域創成プログラム」実践授業

### ①熱田区情報誌「なんじゃもんじゃ通信vol.1 A LOOKING ATSUTA」

取り組みの一つは、熱田区情報誌「なんじゃもんじゃ通信vol.1 A LOOKING ATSUTA」の作成である。地域間交流の前提としてその受け皿となる熱田区の地域実情を学生自身や地域住民が知ることは重要であるという仮説は妥当である。当該地域への愛着があつてこそ、その地域での物事の展開がうまくいくということは、まちづくり論の基本である。地域を「知る」→「伝える」→「行動する」というサイクルの前段・中段を担うものである。

学生の取材による情報収集と情報誌による情報発信、熱田生涯学習センターの講座を通しての住民への情報提供といった取り組みは大学（教職員や学生）と地域（住民や区役所等）、すなわち学・民・公の一体化をはかるうえで重要であることはいうまでもない。

課題として、継続しながら学生の地域を見る視点の多様性や表現方法のレベルアップを図るとともに、住民自身も講座といった受け身的情報収集だけでなく、学生と一緒にたうんウォッチングをしたり、なんじゃもんじゃ通信に投稿してもらうなど、名実とも学・民・公の一体的取組に展開していくことがあげられる。

### ②まちづくり論講座

まちづくり論の講座においては、最先端な現場でまちづくりに取り組んでいる専門家（プロフェッショナル）を講師と迎え、まちづくりの実際について多面的な視点で学ぶものである。現場の声（内容）は、面白く、緊迫感があり、知らない状況を知る知的興奮に満ち、学生を多いに刺激する講座となったことは、講座を聴く学生のまなざしや聴講後の興奮（ある講座では拍手が起こる）、学生レポート内容などから明白であった。

まちづくり論は「論」であるので、理論は欠かせないが、他方で、とくに学生にとっては「実践」も同時に必要である。その意味で、教員もまちづくりの「実践」に一層何らか関わっていくことは課題である。このことで授業内容のレベルアップにつながるし、教員としても人的ネットワークを拡大していくことになるので、外部講師のリストを多く持つことにつながる。

なお、もう一つの取り組みである③熱田区商店街活性化（マイルポスト含む）については後述する。

## (2) もの・まちづくり事業

### ①陶街道交流フェスティバル

瀬戸キャンパスのある瀬戸や美濃（多治見等）や名古屋キャンパスのある名古屋（熱田）はかつてやきもので地域連携があったという史実にもとづき、「東海道」ならぬ「陶街道」で結ぶべく「陶街道交流フェスティバル」を開催した。前半は美濃焼を中心に、「器の感じ方・楽しみ方」というテーマで、後半は「陶磁器ブランドのこれから」というテーマでトークセッションを開催した。

白鳥庭園に入るには入場料が必要にもかかわらず、前半・後半とも多くの市民が来場し聴講していったことは企画そのものの良さを裏付ける証左の一つであろう。

前半は3人の講師によるトークセッションであったが、陶芸家、美術館支配人、空間デザイナーといった実践家の講話は説得力がある。講話を聴けば聴くほどやきもの（陶芸）の世界は奥行きが深いものであると感心する内容であった。このトークセッションだけでなく、それとあわせて陶磁器を「こしかた ゆくすえ」のテーマに展示することで、講話だけでなく現物の展示があることで、より説得力を増すことにつながっている。

地域交流がテーマであるので、「来る」だけでなく「往く」こと、すなわち「往来」することでこそ「交流」といえるのであろう。よって課題としては、今度は瀬戸や美濃の現場へ、地域住民や学生が出かけ、現地の人々との交流を深めることである。「講話」会場と異なり、「現場」は町並みと地域のエネルギーを体感することができるからである。

後半のトークセッションは、ブランドづくりの専門家と陶磁器企業の職人、そして学生という大変興味をもたらす組み合わせのセッションが展開された。ブランドづくり専門家と職人による新商品開発の取り組みは、現在進行形であるがゆえに、聴講者の興味を引き付けるし、うまくいってほしいというエールを送りたくなる内容となっていた。また、学生の素朴な評価は、出来合いでなく、鮮度の高い評価になっていたので効果的であった。

トークセッション場所と聴衆者は池を挟んだ対岸位置にあり、距離間があった。また屋外のため天候に左右されやすく、風がきつくなれば肌寒く、聴講者が減るという状況をもたらしている（白鳥庭園で多くを集客するためにこの会場設営となったことはやむを得ない）。屋外とするなら季節や風雨のことを考え、開催場所や時期を設定する必要がある。

## ②マイルポスト・プロジェクト

名古屋市と大学との地域連携協定を締結（H19.10）の後、2008年1月に日比野商店街の空き店舗を借用して「カフェ&ベーカリー マイルポスト」をオープンさせて、現在まで活動が続いている。地域との協働、地域への貢献を通じて学生が社会人基礎力を養成し、実践力を身に付ける「場」がこのマイルポストであり、それが立地する日比野商店街である。「学生はカフェの運営というビジネスを通じてまちの利害関係者となり、思いやり・助け合い、コミュニケーションの大切さ等を学んでいる」かどうかは、マイルポストという現場での学生の生き生きした顔やホームページでのインタビューからも窺える。そこはまさに実践的課題解決の場になっている。

マイルポスト＝カフェという単純な場ではない。そこはカフェ（飲食）としての機能もあるが、「親子パン作り教室」などを通じた地域交流の場であり、フェアトレードを通じた国際問題への関心を高める場であり、実際にフェアトレード商品を販売することで国際貢献に寄与したり、キャンドルナイトやエコポイントの発行を通じて環境問題を考えたり、カフェメニューを考えることで農業や食育などにも考えが及んだり、多様な教育的実践機能が付与されている場となっている。すなわちマイルポスト自身が成長してきている。

ここでの体験をどれだけ多くの学生が共有できるのかは課題であり、また既存の国際貢献、食育、環境などのほか、コミュニティ活性化や福祉（高齢者の居場所づくり）など、新しい教育的実践機能の付加も考えられよう。

（評価者：井澤知旦）

# 文部科学省GP採択シンポジウム ● ● ● ● ●

## 「現代の若者気質を活かす教育」

- 日 時：7月26日（土）13：30～16：40
- 場 所：名古屋学院大学名古屋キャンパス白鳥学舎
- 入場者：161名（大学・短大等関係36名、中学・高等学校関係2名、一般36名、  
本学教職員44名、本学学生43名）

### ■概 要：

基調講演1では、お茶の水女子大学大学院の耳塚寛明氏より、高校と大学の接続という「入口」の視点から講演をしていただいた。耳塚氏は、日本の高校教育の質を維持する上で貢献してきたメカニズム、つまり「学習指導要領」と「大学入試」という両輪はもはや機能していない。そこで、高校教育の質を保證する第三のシステムをうまくつくらなければ、大学教育はその入口部分で大きな困難を抱え続けることになるだろう、と述べられた。また、大学初年時教育においては、「生徒（知の効率的受容者）」から「学生（知の生産者）」への変身を促すことが重要だと課題を挙げられた。

基調講演2は、独立行政法人労働政策研究・研修機構の小杉礼子氏より、大学生の就職という「出口」の視点からの報告であった。小杉氏は、現代の大学生の就職活動は、インターネット情報に頼りすぎであり、企業人・職場訪問による情報収集が大幅に減ったことが課題である一方、企業が採用したい人物像は、行動力、協調性、バランス感覚のある学生で以前と変化がない。つまり、課題解決能力やコミュニケーション能力が重視されるが、それらはゼミや課題解決型の学習、あるいはサークル活動やアルバイトなど自ら動く経験で身につくものである。実際に動くことが大切で、それが就職にも影響するということを学生には認識してほしい、と述べられた。

その後のトークセッションでは、文部科学省GPプログラムに採択された本学取組を具体的なケースとして、現代の若者気質を活かす教育はどうあるべきかについて、耳塚氏、小杉氏と担当教員との間で議論を行った。現代の大学生に身につけてほしいものも多くある中で、失ってほしくないものもある。本学の取組が学生生活でどのように効果的に影響するか、さまざまな意見が飛び交った。

ポスターセッションも同時開催され、来場者と担当者の質疑応答を通して、本学のGP採択取組への理解を深めていただくことができたと思う。



---

発 行 日 2009年3月31日

編集・発行 名古屋学院大学 経済学部 現代GP推進委員会

委員長 木船久雄

委 員 井沢俊泰・大石邦弘・笠井雅直

河原林直人・古池嘉和・澤田充

十名直喜・名城邦夫・水野晶夫

連 絡 先 〒456-8612 名古屋市熱田区熱田西町1番25号

TEL:052-678-4080(代) FAX:052-682-6811(代)

印 刷 株式会社 鈴活印刷

---



Culture & Human Resources

NAGOYA GAKUIN UNIVERSITY

名古屋学院大学

<http://www.ngu.jp/>